

譲れない、この思い

風風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウマ娘として転生した元男のプロローグ。

ただ成ったのが迷馬と呼ばれるツインターボ師匠。

元男は競馬を知らない模様。

目次

譲れない、この想い

俺が見たいのは、いつだって頂きの世界だった。

懸命に逃げ切ろうとする人も、ペースを考えて体力を温存する人も。

皆一様に抜き去って、自分一人が奏でる蹴音けりおとと高速に流れる景色だけが見える。

そんな、静かな世界が欲しかった。

そう思ったのは中学校2年生の頃。

田舎に生まれ育った宿命か、毎年冬になると学校行事でマラソン大会が開かれていた。

1、2、3学年とそれぞれ分かれる形式を取って行われるそれに『今年こそは』と気合いを入れて挑んだ。

結果は大金星。

2位に大差を着けての1着。

少なくとも喜びが心を満たす中、それ以上にあの景色をもう一度見たいと思った。

#

目の前には遠くを走る人影。その大きさは徐々に小さくなっていく。

そして、息も絶え絶えの自分。

頬を伝う汗。悲鳴を挙げる心臓に、乳酸の溜まった足を装備して走る様は、有り体に言って限界だった。

ここで歩みを緩めても良いのだろうか。

順位は2位。後続の足音も聞こえないこの状況は、そのまま順当に行けば好成績を残すことを示唆していた。

——惜しかったな。でも良くやった。

——次がある。また頑張ろうぜ。

担任やクラスメイトの幻聴が耳に木霊する。

(……ふざけんな。まだ終わってない)

反論。弱々しく、信頼性もない。だからなのか、そいつらはまたも

甘言を宣^{のたま}ってくる。

——だが、もう無理だろう？

——そうだ。無理だ。やめた方が良い。

(……無理なんかじゃない。まだ走れる)

虚勢を張る。そうしなければ心が砕けそうだった。

——どうして走る？このままなら2位だぞ？

——そうだ。格好いいじゃん！

「……格好良くねえ！1位じゃなきゃ、意味がねえんだよ!!」

激情と呼べる感情が体を支配する。顔を地面に向け、小さく叫んでいた。

——なら、手を振れ。足を動かせ。

——そうだな。だってお前は。

辛く、苦しく、しかしそれでも尚負けたくない一心で体を動かす。

——1位になりたいんだらう？

「……ッ!!」

瞬間、全てが切り替わった。

今までの苦痛が嘘のように消え去り、蓄積されていた疲れも全て吹き飛んだ。

走れど、脳から送られる電気信号のムチは足の回転数を徐々に上げる。それだけでなく、疲労という概念が一切感じられない。

(なんだ？コレ……)

当然、困惑する。俯かせていた顔を上げてしまう程だった。

疑問符が頭を埋め尽くし、しかし立ち止まる事なく、遠かった人影も徐々に近づく。

500m、300m、100m、並び、抜き去る。

「えっ」と驚愕した声を後ろに聞いて、ペースが落ちることなく、むしろ更にかけてゴールテープを切った。

恐らく、抜いてからテープまでの距離はそこまでなかったのだろう。あつたとしても精々1kmと言ったところか。

しかしその中で、今までにない心地良さを感じた。

(……綺麗だ)

失敗した絵画の様な景色。
轟轟と風を切る音。

誰も見えないそこは、きつとこの世は自分だけしか居ないんじゃないかな
いかと錯覚してしまうくらいに不可思議で、神聖な場所の様に映る。
俺はその時、確かに、頂きの世界へと足を踏み入れた。

#

「ん……」

目を開ける。

ここ数年、幾何学的な木目が特徴の見慣れた木の天井が広がる。

次いで頭痛。

あまりの酷さに頭を抑えた。そして襲来した嘔吐感に苛まれ、ベッドの近くに置いてあったポリ袋を掴む。

「っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

胃の中の物が食道を通り、外へと吐き出されていく。その感触があまりにも不愉快で、またもや気分が悪くなった。

「ハア……、ハア……」

辛気臭い顔。

姿見に映った自分を見ての印象はそうだった。ボサボサの髪に、隈の目立つ目。痩せこけた頬と無精髭が生える顎。

全体的にやる気の感じられない雰囲気を出しているその姿は、1ヶ月前には考えられなかっただろう。

「……どうして、こうなったかな」

封をした袋を床に置き、またも身体をベッドに預けて呟く。

駅伝の最高峰、箱根駅伝。

大学に入ってから4年間、それに挑むべく日々研鑽を続けてきた。
俺は出来ることをやって来た。最高のチームで最高の成果を残してきた。

予選も通過し、最期に出られる。
誇らしく、絶対に勝つてやろうと。

そう思っていた。

気付くと地面に転がっていた。
事故だった。

大学から自分の部屋までを帰る最中。横断歩道を渡っている時に、信号無視をしてきた車と衝突した。後に聞いたところによると、眠ってしまつたらしい。幸い、スピードがあまり出ていなかった為
に命には別状がなかった。

そう。

命には、だ。

右足に痛みを感じ目を向けると、あらぬ方向へ曲がっていた。誰が見ても骨折していた。

瞬間、汗が全身から吹き出た。

痛みからもある。しかし一番は、2週間後に迫つた箱根駅伝のこと。

間に合わない。

間に合う訳がない。

案の定、医師の診断もそうだった。『酷なようだが』と口上を垂れる生物の言葉を上の空で聞く。下らない言葉遊びに付き合うつもりなど毛ほどもなかった。

「……」

あれから1月。

未だギプスで固定されている右足

を柵に、ベッドから降りて直ぐの所にあるローテーブルの前に座る。

その上にあるのは友人に頼んだ缶ビールと、眠れないからと医師に処方して貰つた睡眠薬。

前日のアルコール成分は身体にまだ残っている。

それだけでなく目の前にある1缶と、多量にある薬を飲んだらどうなるか。

「……飲むか」

想像して恐怖することは、なかった。

酒を一気に煽り、10にも届きそうな量の錠剤を含んで飲み込ん

だ。

そのまま目を瞑り、何れ訪れるであろう深淵に身を任せる。半日も経てば物言わぬ骸の出来上がりだ。馬鹿な大学生が、馬鹿なことをした。そう、周囲に認識されるだけの話。

(言われるだろうな……)

けれども、走ることは俺にとっての生き甲斐だったのだ。

それも最高の舞台で、最高のパフォーマンスで、最高の勝利を見せる。

しかしその一生に一度の舞台を閉ざされた現状に、どう希望を持つというのか。

「だから。次は……」

少し薄くなってきた意識にムチを入れ舌を動かす。最期になるかもしれない願いを発する為に。

「どうか、お願いします……」

——どうかあの世界を、駆け抜けられますように。

#

雲一つ無い晴天の空を、群鳥が己の象徴足る翼を広げて翔んでいく。

そのありふれた光景が何故かとても大切に感じられて、青々しく茂る芝生を背に寝転がっている私は、思考を忘れて呆けてしまった。

「……」

息を吸って、静かに吐く。

繰り返して行っている内に激しく動悸していた心臓は鳴りを潜め、走った影響で昇った体温を冷やそうと静かに鼓動している。

サアと、時折吹く風が更にそれを助長させた。

「気持ちいい……」

思わず瞼が重くなってしまうくらいには平和で、心地の良い空間。

「」

いつそのこと何時間か続かないかと思い、しかし、誰かが私を呼ぶ声が耳に届く。

「……あ、忘れてた」

身を起こし、声がした方向に目を向けると、微かに人影が見える。ヘナヘナと垂れた右耳に力なく左右に振れる尻尾が、一緒に走っていた彼女の疲労状態の時とマッチしていて苦笑する。

「ごめん、ごめん。走りすぎちゃった」

近づいて朗らかに声をかけた。それが癩に触ったのか、顔を地面に向け、膝に手を着いている彼女は100年の恨みとも呼べる程の低い声で文句を言う。

「ま、毎回……、付き合わされる……つ、私の身にも、なつてよ！」

「だからごめんつて、シロちゃん。今度お母さんの作ったクッキーあげるから」

『シロちゃん』もとい、ホワイトストーンはそれを聞くと目を輝かせ「絶対？絶対だからね!？」と

食らい付いてくる。少しだけ引いてしまった私は普通な筈だ。

「……うん。それじゃあ暗くなってきたし帰ろうよ」

「そうだね。なら……競争だ！」

「えっ!?ちよつと待つてよツイン〜!!」

言つて、駆ける。

直ぐにトップスピードへ至った私の身体は世界を置き去りにした。

皮肉な話だと、そう思う。

人の生を得て、終わり、気付いた時にはまた始まっていた。

もう無理だと嘆いていた私は、突拍子もない形で望んだものを手に入れることが出来た。

しかしそれは、私にとつて証明しなければならぬ宿業となった。

ある輩は言うだろう。

『それが本当に望んだことか?』と。

ならば私は、胸を張つて『そうだ』と言おう。

元々走る事しか脳のない人間だったのだ。それが私、ウマ娘である『ツインターボ』としての価値に繋がる。これ程、嬉しいことはない。

「待つてよおー!!」

だから走つてやろう。

多数のウマ娘を感じる筈の世界を。

私が全て、走ってやろう。

「いっくぞおおおおお!!」

翔んでいた群鳥は、茜の空へと去っていった。